

日本語版のための解説

「考古学・文化財デジタルデータの Guides to Good Practice」について

「Guides to Good Practice」は、ヨーク大学 Archaeology Data Service（以下、ADS）とアメリカの Digital Antiquity（以下、DA）による2年にわたる共同プロジェクトの成果に基づいて作成された。本ガイド（手引書）の主な目的は、アメリカの DA およびイギリスの ADS において、効果的にデータのアーカイブや共有ができるデータセットを作成するためのワークフローの基礎を提供することであった。

日本語版作成にあたって

- ・本書は、ADSとDAによる Guides to Good Practice の日本語版である。なお、原版である英語版は、ウェブサイト (<https://guides.archaeologydataservice.ac.uk/g2gp/Main>) において電子公開されている。
- ・デジタルアーカイブに関する海外の先進的な実践成果を日本に紹介する目的で制作した。
- ・日本語版制作のための翻訳・編集は、奈良文化財研究所企画調整部文化財情報研究室の高田祐一、Peter Yanase、野口淳（客員研究員）がおこなった。
- ・「データ収集と現地調査」「データ分析とビジュアライゼーション」の項においては、抜粋して刊行物化したために、収録しなかったセクションがある。

翻訳について

翻訳にあたっては、なるべく原文に忠実に訳すことを心がける一方で、日本人にとってできるかぎり平易で理解しやすい文章となるよう心掛けた。しかし、文脈によって英語に対する日本語の訳語を意識している場合があるうえ、多少の異同が生じており、完全な統一がとれていない場合がある。また、用語訳については学術用語集、情報通信分野の辞典などを参考にしたが、必ずしも定訳があるわけではなく、各野の専門書・雑誌などからも適宜参照した。

原文において、原則として太字で表現されているものは、訳文でも太字で表現し、原文の（ ）は訳文でも（ ）としている。

原語をカタカナ表記する場合は、単語をつなげて表記しているが（デジタルアーカイブ、グッドプラクティスなど）、区切って表記の方が語句の意味することを正確に表現できると考えたものには、「・」を挿入している。

各論文の挿図は、原版の挿図を使用した。図版によっては不明瞭な部分もあるが、本書では原版をそのまま用いることにした。一部をのぞいて図の説明文の翻訳だけにとどめ、必要と思われる場合には、図版中の言語の訳語などを訳註で補足している。

本文にもあるように、様々な分野においてデジタルアーカイブに携わる方が読むことを考え、できるだけ技術的・専門的な用語等は、専門領域に依存しない語を用いるようにした。なお、本モデルをもってはじめてデジタルアーカイブに関わるようになった人にも理解しやすいよう巻末に簡単な用語集をまとめた。なお、用語集は本来 GIS と航空測量の項にあったものを統合した。

免責

本書に記載された内容は、出版時から状況が変化している内容もありうるため、本書を用いた運用は、かならず自身の責任と判断によることとされたい。これらの情報の運用の結果について、ADS および奈文研はいかなる責任も負わない。